

[特集：地域と民族の生活文化]

## 文化自覚と中国における祝祭日と休日制度の改善<sup>1)</sup>

Cultural Consciousness and the Time management of China as a Nation-State:  
The Problems of Chinese Calendar system and its Possible New Structure

高 丙 中

GAO Bing Zhong

北京大学社会学人類学研究所

*Institute of Sociology and Anthropology, Peking University*

*E-mail: gaobzh@pku.edu.cn*

### Abstract

This paper aims at the emergent contradiction the Chinese people faced in the past six years: The common people have been assigned long national holidays without important enough social activities on one hand, but on the other hand, they don't have time when they need holidays to enjoy their festivals. Responding to Fei Xiaotong's conception of "cultural consciousness", the author described briefly the history of the change of traditional festivals from "national" time in the pre-modern society to "folk" time in the modernization project designed by the state and its intellectuals, and tried to reveal the cultural problems of the national holidays based on the celebration days of the state during the construction progress of modern nation-state. The author made efforts to clarify that China as a modern nation-state and a people's republic should have a calendar based on the "nation" as a cultural identity and the "people" as citizens with cultural rights. Finally a new structure of Chinese calendar is outlined with stressing the position of "folk" festivals.

**Keywords:** cultural consciousness, nation-state, festivals, national holidays, social reproduction

費孝通先生は近年自分の学術研究過程を振りかえりながら、現代中国の文化変遷と社会

---

1) 本稿は2005年2月1日(火)に愛知大学国際コミュニケーション学会主催で開催された第34回国際学術交流プログラム講演会における講演記録にもとづいている。司会を務められた周星教授、通訳の張慧娟さんに感謝を申し上げる。

発展の中で知識人の役割を考え、文化自覚の概念を提起した。先生はまず1997年に北京大学が開催した第二回社会学人類学高級研究討論グループでこの概念を明確に提起した。また、1998年に北京大学百年創立記念期間中に行った第三回高級研究討論グループの講演会に自分の学術研究経験を結びつけこの概念を再び論述した。その後先生はこの概念を何度も用い、徐々に多くの研究分野の学者に認められるようになった。

文化自覚とは、文化に対する自信を有した上で自分の文化にその由来、得失に対し冷静な再認識を行うことである。文化自覚は文化交流をこえたことを前提とした自我文化に対する一種のおのれを知るの明である。文化自覚は文化上の盲目性を克服し、また、その民族の文化の現実から民族の将来に対するマクロな視点を考えなくてはいけないということである。それは西洋に影響を受けた我々の現代化過程を反省する概念的道具でありながら、正しい文化発展の方向を指し示す考え方でもある。文化自覚の概念にもとづけば、今日における人文知識人に対して一つの視角を増やすことができ、自分たちの民族国家に対しての使命を明らかにさせることができる。本稿はこの概念を使って、近代以来中国における祝祭日制度の問題点を振りかえり、民族文化の発展に有利な意見をいくつか挙げてみたい。

祝祭日文化は民族の生活文化の集中的あらわれであることを直接的に見ることができる。また、現代国家の祝祭日システムは、一つの国家の根本的な価値の位置方向を定めることと、その民族の精神状態を反映した風向計であり、政府と民衆、国家と社会との関係を反映する重要な指標でもある。国家が祝祭日制度を制定するとき、祝祭日をいかに民族文化を反映するものとして、民族に親近感を強めさせるメカニズムになるかを考慮すべきである。このような考え方から、わが国の祝祭日制度に対する配置に、認識上の偏りと技術上の問題が存在していることを見て取ることができる。

社会は、近年の中国祝祭日制度の問題に対して高い関心を持っており、いくつかの批判と改善の意見を挙げている。中国の祝祭日制度の直接な問題点は主に法定休暇に充実した文化活動がなく、それに対して豊富で多彩な民間の伝統的な祭日文化が、法定の休みにならなっておらず、活動を行うための十分な時間がないことである。その深刻な問題は、我々が国家と社会の関係、政府と民衆の関係、伝統文化と現代文化の関係を上手く処理できていないことと、時間の道具性と政治性との関係を上手く処理できていないことにある。現代において西暦を本当に旧暦に取って代らせようとした時、暦法はただ時間を計算する道具であるようにしか見えない。伝統的な祭日習俗を何回も消滅させようとするれば、伝統祭日を代表する時間的フレームは、我々の共同体に政治と文化の意義を認識させない。簡単に言えば、当時の変革は文化自覚意識が欠如していたといえる。

祝祭日システムの問題を解決するためには、国家が春節、清明節、端午節、中秋節或いは重陽節を含むこれらの重大な祭日に対して、普遍的、かつ大衆の基礎を有した時間的主

軸であるという事実を認めた上で、法定休みの配置を新たに調整する必要がある。また、国家系列、現代系列、民間系列及び伝統系列を1つの祝祭日システムの中で、新しい時代の需要に符合したつながりをもたせる。そして、十分な普世性をもたせて国際交流をスムーズにし、豊かな民族性をもつことにより社会の文化価値を伝わらせるのである。

## 中国における祝祭日システム変遷の主脈

### 伝統祝祭日システムの形成と発展

中国伝統行事システムは先秦時代から始まり、秦漢魏晋南北朝に成長期を迎え、隋唐両宋に定着した。先秦時代では春社、伏日、社日、腊日を中心とした年中祭日系列が形成され、子孫に豊かな文化のフレームを築いただけではなく、その時期に蓄積した二十四節気をはじめ、干支日記の暦法、先祖参拝、天地参拝など原始的な宗教信仰も後世の豊富な民俗祭日の創立に多くの文化素材を提供してくれたのである。

秦漢魏晋南北朝に、中国の祭事に関する習慣は目覚ましい発展を遂げた。新しい社会経済条件、安定した暦法及び道教、また、仏教に潤されたことがこの時期の繁栄した民俗行事の成長点であり、栄養素でもあった。この時期の祭事系列は梁の時代の宋懐の「荆楚歳時記」に代表されている。主に一月一日の元旦、一月七日の人日、立春、上元、一月の晦日、二月八日、春分、社日、寒食、三月三日、四月八日、四月十五日、夏至節、六月の伏日、七月七日の夜、八月十四日、秋分、九月九日、十月の朔日、冬至、十二月八日、除夜などを含んでいた。その中に、一月十五日が元宵節になってはいなかったということ以外に、清明節と中秋節も祭事と見なされていなかった。

民俗行事においては隋唐両宋に大きな発展がみられた。宋の時代に陳元靚の「歳時広記」により、当時の祭事は元旦、立春、人日、上元、正月晦、中和節、二社日、寒食、清明、上巳の節句、釈迦の誕生日、端午の節句、朝節、三伏、立秋、七夕、中元、中秋、重陽、小春、下元、冬至、蟬日、交年節、歳除があったという。これらは伝統社会における重要な祭日をほぼ含んでいた。元明清の時代にはこれらのシステムに対して大きな変化が見られなかった。しかし、伝統祭事は大きく調整され、社会活動の中で民衆生活の需要に応じて新年、清明、端午、中秋というこの四大祭事の地位を高めさせた。

重要な伝統行事は当局の祭日でもあり、それは官と民が祭日システムを調和させ、統一させたことを表れていた。歴史的には、重要な祭事の休み期間は、十日間、七日間、三日間、一日などまちまちであった。例えば、官僚休みは唐の時代に中秋節は三日間、清明節は四日間であった。明の時代では冬至は三日間、元宵節は十日間であった。

中国における祝祭日システムは、成熟した文明の縮図である。それは、我々の先祖が長期にわたって絶え間なく自然原則を探索した結果であり、科学的な天文学、気象学と生物

季節学の知識を大量に含んでいることであり、また中華文明の哲学思想、美意識及び道德倫理のまとまった表れでもある。このような科学的な時間フレームがあったからこそ、中国古典文明の繁栄があった。また、このような繁栄した中国古典文明があったからこそ、祝祭日システムの内容がここまで多彩なのである。

中国伝統的祭日システムは社会に時間のフレームを提供しながら、社会の時間モデルをも作り出した。それが根拠とする暦法は主に旧暦であったが、同時に西暦をも用いている。旧暦は月の周り方、弦、望、晦、朔により月の周期を決めた。西暦の場合、地表で観測した太陽の変化によって毎年の周期を決めた。中国人が先祖代々受けついできた知識の積み重ねにより、漢の時代に完成した二十四節気は科学的な西暦年の周期であった。例えば、春節、中秋節などは月の満ち欠けと関係していて、清明節、夏至、冬至などは太陽の回帰線上での行き来と関係している。太陽・月と人・自然との関係をまとめあげることによって祭りの時間を決め、人と自然（天）との関係をよりよく表現することができたのである。中国人の月と月の光に対するきめ細かい感覚は個性的な文化創造に発展した。それによって積み上げられてきた文化は人類文明に対して多大な貢献をした。中国人は陰陽のバランス、天人合一、自然に身をゆだねるという哲学思想を重視している。柔和の美を好み、団欒の美学と倫理的概念を重視していることは、中国独自の祭日システムの中に含まれている。このような思想は東アジアにも長期的かつ深い影響をもたらし、今日も依然として韓国、日本など一部の地域で息づいている。

### 現代中国の祝祭日システムにおける二重構造

中国伝統社会の中で、朝野、官民、雅俗、貧富、貴賤を分けることもあったが、祝祭日を代表する時間フレームから見ると高度な調整、再編成と統一が見られていた。当局の祝祭日は民間の祭事に順応していたのである。しかし、現代ではこのような官と民の時間フレーム上の調和関係が二重構造になっている。この現象により抑制と抵抗や、共存と相補などの複雑な関係を生じたのである。

辛亥革命以後、中華民国政府は自らの現代性を標榜するために、王朝遺産としての“旧暦”を放棄し、西暦を使用した。中華民国を年号として歴代の皇帝年号にとって替えた。西暦の1912年1月1日を中華民国の元年とした。最初の法令<sup>2)</sup>により、中華民国は西暦を中心に、旧暦を兼用すると定めた。中華民国が自分の祝祭日システムを形成する以前

2) 1912年1月に孫文は《臨時大統領の暦に関する公布令》に署名した。その正式に発行された文書の中に次のように記載されている。“一、政府は12月までに暦を制定し、各省に公布する。二、新旧暦を兼用する。三、新暦に曜日をつけ、旧暦に節気をつけること。四、伝統的な習慣を保留し、暦に付録をつけ、吉か凶かなどのことを一律に削除する。”——中国第二档案馆：《中華民国史档案資料匯編》第二輯，江蘇古籍出版社1981年，第18-19頁を参照されたい。

に、伝統祭日を法定休みとして好んで使用したことがあった。1914年1月に北京政府内務部は袁世凱に献上した文書の中で次のように提案している。「旧暦の元旦を春節に、端午節を夏節に、中秋を秋節に、冬至を冬節に定めること、全ての国民は休みがえられ、公務員には一日の休みを与えることを願う。」<sup>3)</sup> 袁世凱はこれを許可した。従来の旧暦の1月1日は「元旦」、または「新年」と読んでいた名を西暦の1月1日に移し、旧暦の1月1日は「春節」と呼ぶようになったのである。

現代国家はその誕生以来、自らが歴史を開くという自信のもと、自分たちが記念すべき重要な日を国民の休日として決めた。1912年9月24日に北京臨時政府が提出した「国慶日和記念日案（国慶節と記念日の案）」に関する案が参議院の可決を得た。その中には10月10日を国慶節とし、1月1日を中華民国臨時政府の成立記念日とし、2月12日を共和、南北統一記念日と決めた。1929年まで、このような記念日を28種類まで増やした。その後その覚えやすさと休みのとりやすさのために、記念日を削減したり、合併したりして更に記念日の数を減らしたのである。中華民国における主な祝祭日には元旦、国慶節、革命烈士記念日、国恥記念日、国父誕生日、国際労働婦人デー、子供の日、メーデー、学生運動記念日、教師の日、植樹節などがあった。政府と国の関係部門は西暦によって新たな祝祭日システムを打ち立て、更に、それらの祝祭日には自分独自の新しい儀式を行ったのである。

一方で、民衆、特に都市自営業者と農民は、依然として旧暦に準じて自分の年月と祭りを過ごし、祭事活動を行っていた。それら国民の祝日を過ごす人々は、実家に戻っても伝統的な祭事活動に参加しなければならなかった。西洋文明を基準に、現代化の推進によって自分たちの祝祭日システムをうち立てた国民政府にとって、これは無視できないことであった。彼らは政府の時間フレームで民間祭日を調整しようという強い決心をした。1928年5月7日に内政部は国民政府に、「旧暦を排除し、国暦を使用するように実施する」<sup>4)</sup> という社会的なプロジェクトを実行するように要求した。その改善の理由は、「十数年来、日常社会状況を調査した結果、依然として旧暦を使用し、それを換えようということを知らない、……一般民衆は祭りや休みを依然として旧暦で行っていた。一国の政府のもとで、何度も改革をしたが、政令と社会の現状にはこれほどにも差がある。もし、それを根本的に改革せず、早急に新しい元年を是正しなければ、異国に笑われに違いない。また、国家体制とも矛盾し、我々の革命の目的から大いに逸脱している。」<sup>5)</sup> その結果、「改善方

3) 伍野春、阮榮「民国時期的移風易俗」『民俗研究』2000年第2期、第67頁を参考した。

4) 中国第二歴史檔案館『中華民国史檔案資料匯編』第伍輯第一編文化類、江蘇古籍出版社1991年版、第424-426頁。

5) 中国第二歴史檔案館『中華民国史檔案資料匯編』第伍輯第一編文化類、江蘇古籍出版社1991年版、第424-426頁。

法を八項目制定し、根本に徹底した改善を求める。」<sup>6)</sup>ということであった。

その第二条では個人が旧暦の販売や新旧暦の対照表の販売を禁止している。第三条では北京市内の各政府機関、学校、団体が国暦に規定された休日以外、旧暦の節気に対して、民俗習慣による休みを一律に禁止している。第四条では国側が各省、区、市に適切な規則を制定し、すべての旧暦の祭日に関する行楽、祭り活動などに、一律に指導と改善を加え、国暦に即して活動を行うことを民衆に公告するということを命令した。例えば、旧暦の元旦に行うべきすべてのにぎやかな活動を国暦の新年の正月に移した<sup>7)</sup>。しかし、幼稚な一新政府が何千年の文明を通じて積み重ねてきた民俗祭日を無理に変えようとしたことは、自然に希望とは裏腹になるのであろう。引山東学者は「広饒県誌」という本の中で、「民国は西暦にかえ、西暦の祝祭日を過ごすを提唱し、当初はうまく行われていたが、その後、国民に対する監督が緩んできたため、依然として旧暦へと偏り、古い習慣が依然として残されていた。」<sup>8)</sup>と書いている。南京国民政府はやむをえず、1934年の年初に、強制的に旧暦を撤去することを停止するようになった。同時に、「旧暦の祭日に対して公務機関以外、民間の習慣に干渉し過ぎてはいけない」<sup>9)</sup>ということ承認せざるを得なかった。

一つの政治共同体の中で、一年に二つのお正月を過ぎさなくてはならなかったのは、結局、当局の祝祭日は一種の国家制度として、民衆の関心、支持及び参加を得ることができなかつたということである。しかし、民衆の重大な祭事活動は当局の制度上の承認を得ることができなかつた。中国の古代からの家と国家の一体、官と民一体の祝祭日システムはこのように分裂され、明らかに欠陥のある二重構造になってしまった。

中華人民共和国の政府は前政権が残した多くのものを革新したが、その祝祭日システムの二重構造はそのまま受け継いでしまい、単に政府の祝祭日を微調整しただけである。訂正された主な祝祭日は元旦、植樹節、国際労働婦人デー、メーデー、青年節、子供の日、党の誕生日、建軍記念日、教師の日、国慶節と伝統的な春節を加えたものであった。その中、法定休暇を元旦、春節、メーデー、国慶節に配置した。1949年12月23日に政務院がこの制度を公布した。新政府は大きな社会動員能力を有し、政府の祝祭日活動に参加する民衆を引きつけ、組織することができた。しかし、伝統は依然としてその慣性を持っている。私有経済が継続的に存在しているので、都市の自営業者と農村の人々は時間的融通をきかせることが可能であり、彼らは伝統行事の時には自分に休みを与え、祭事活動の継続

6) 中国第二歴史档案馆『中華民国史档案資料匯編』第五輯第一編文化類、江蘇古籍出版社1991年版、第424-426頁。

7) 楊飛霞“人民对春節的改革”未刊稿。

8) 簡濤『立春風俗考』上海文芸出版社、1998年版、第224頁。

9) 伍野春・阮榮「民国時期的移風易俗」『民俗研究』2000年第2期。

に時間の保証を提供した。そして、長期にわたる戦乱から抜け出し、社会が安定し、民衆の生活がある程度改善され、人々がよりよい伝統的な祭事活動を行うことができるようになった。もちろん、一部の新社会を代表するような活動も伝統行事の中に織り込まれた。

伝統的民俗祭日は、中華人民共和国の中でも様々な曲折があった。最初の十数年に政府は新たな文化を絶え間なく創り、自分の価値により記念活動の儀式を蓄積した。さらに伝統行事の習慣活動をできる限り国家イデオロギーに有利な方向へ向かわせようとした。しかし、依然として民間の自発的な伝統行事を容認したのである。その間、生活レベルにおいては文化調整を行うという一貫した意図のもと、一旦条件がそろえばそれは徹底的に取り消された。

ここで比較的境遇のよい春節を例に取り上げよう。中華人民共和国設立当初、春節は全国民の休日であり、三日間の休みが与えられた。これは国慶節（2日）、メーデー（1日）<sup>10)</sup>、元旦（1日）の休み期間より長かった<sup>11)</sup>。春節は新しい国家制度に取り入れられ、人々は毎年それを過ごしていた。その他の休日はどれも政府の設けた儀式活動を行なうことで、政府の理念に合致した。ただ春節だけは、旧社会からの法定休日であり、時代の言説と初めから緊張関係を有していた。

過去の「人民日報」からみると、春節期間中に行われた参拝活動（迷信）、爆竹（危険）、大盤ぶるまい、派手に飲み食いする（浪費）という活動はずっと批判を受けていた。文化大革命に入り、1967年1月30日に国務院は革命情勢のために、大衆の要求により春節の国民休暇を撤去するという知らせを出した。翌日の全国の新聞には賛同の声が寄せられた。その後の十数年間に毎年同じ時期になると、新聞ではみんな鳴り物入りで宣伝し、国民に一つの「革命化春節」を過ごすように要求した。即ち、正月を休まないで、「革命に力を入れて生産を促進する」ということであった。当時、わが家の豚小屋の扉に、「大晦日にも停戦せず、元日も頑張って働く」というスローガンが書かれていたことを覚えている。1979年1月17日の「人民日報」には、「なぜ春節を休みにしないのか?」、「農民に安定した春節を過ごさせよう」という二通の読者からの手紙が掲載されていた。それをシグナルとして政府は春節休み制度の回復の態度について表明した。数日後、一部の省区では春節休みの回復を発表し、その翌年に全国的に旧制度を回復した。

中華人民共和国は、国家イデオロギーの文化整理を強化するいっそうの能力を有している。正常な祝日を過ごすために民衆共通の自由時間を有すべきであり、言い広めるべきであり、誇りを有すべきである。多年の社会主義実現を経過して、都市自営業の改造と農村人民公社の建設は民衆の時間を国家管理範囲内に入れ、国家の宣伝教育と文化革命は伝統

10) その例外もある。例えば、1953年4月29日に政務院が通告したメーデーの休日は二日間でした。

11) 政務院令の270号（1949年12月23日）『全国年節及記念日放假弁法』を参照されたい。

的な風俗習慣を反面的なものにした。人々は昔から残された年中行事を過ごす時間の余裕がなく、公然と活動をする勇氣もなかった。やったとしても個人的に簡単な形式で行うことしかできなかった。文化大革命の“四つの古いものを破壊しよう”という活動が行われてから、民衆は、国家の祝日活動と生産活動に参加することを組織されたこと以外に、伝統行事を行う機会はなくなったのである。その二重構造の主役でない民間行事はその特殊な時期に隠れてしまった。ただ一部分の民衆だけが依然として簡単な形式で伝統行事を行っていた。

改革開放二十数年以来、人々がますます大きな自主権を獲得し、自分の時間を自主的にコントロールすることができ、個人的に非公式的な公の場で自分の活動を行うことができるようになった。この長い間の自発的な選択を経て、伝統行事は全国の都市と農村で大きな復興を得た。民俗行事は二重構造の劣性から優性に転換した。国家は民間における祭日システムの復興の事実直面し、春節を国民休日とし、同時に、休日数も延ばした。このような調整の方向は正しいが、認識上の限界があるため、調整は十分とはいえず、官と民の分立という基本的な構造は改善されていないのである。

中国が現代民族国家の二つの共和国を設立しようと努力している時、民間の伝統文化は長期にわたる打撃と破壊を受けた。政府は現代国家を作るために、西洋文化を導入した。それを伝統文化と融合させるために、いくつかのプロジェクトや実施の手段を採用した。これは政策の主な方向として間違っていないが、その問題点として、①政治家たちが成功を焦ることによって、結果的には逆なものになってしまったこと。②知識人が伝統と現代の関係について偏った考えを提出したことが挙げられる。即ち、祭日習慣の強い生命力から見ると、西洋から導入された新たな文化が、伝統的な民間文化を独占或いは消滅させようとすることはできないのである。境遇を抑えることは抵抗を招く。その結果、それが隠れた後、再び復活するのである。このことはわが国と同じように近代化の道を進み遅れた日本が有している、伝統民俗と現代文化との正確な関係を結成させるという歴史とは異なっている。日本の知識人と当局は伝統文化を適切に対応するという明確な概念を有している。更に、伝統と現代の関係を妥協し、相互補充によって融合する方法を見つけた。しかし、わが国では、「人民」がない共和国と「人民」がある共和国どちらにもかかわらず、知識人は、皆国家イデオロギーと伝統的な民族文化とを友好的に結び付ける方法を見つけていないのである。

## 今日の祝祭日システムに対する反省

過去二十数年間の間、国家における国民の休みは大いに増加した。これはわが国の経済の発展と、社会の進化を表している。しかし、我々の研究により、祝祭日の休日を増加さ



せることは正しいことであるが、現代の祝祭日システムに、新たな考えを加えることを検討すべきであると発見した。メーデーと国慶節の休日数は長くなったが、国家はこの休み時間の間に、非常に簡単な儀式しか行わず、多くの民衆は必ずやるべきことはない反面、民衆にとって非常に大切な清明節、端午節、中秋節などの祭事には様々な活動を行うための休み時間が必要であるが、国家は休日をこれらの祭事に配置していないことである。また、春節には長い休みが配置され、民俗の需要を考慮したようであるが、そうではない。実際には国家が春節の休みに民俗活動の需要を十分に考慮しているわけではない。例えばその休み時間が一日からということは、人々が伝統的な活動を行うには不便である。大晦日の活動に休みの時間を提供しなければ、伝統的立場からお正月の問題を考慮しているとはいえない。つまり、明らかにしたいことは、現在の休日制度は伝統祭日システムの需要を十分に考慮していないといえる。

国家が法定休日を増やす主な目的は、欠乏経済から過剰経済への転換に適応しようということである。欠乏経済期において、国家は生産総額を向上させるためにできる限り労働時間を増やし、欠乏している物質の需要量を減らす必要がある。我々は生産過剰（或いは部分過剰）の経済発展段階に入る時、国家が直面している問題は供給不足から需要不足への突然の変化である。経済学者らは休日を増やすことによって消費量を高めることを主張した。（労働を減らし、余暇の消費を増やす）

休日を増やすことはそれなりの役割を果たしているが、最大限の役割を發揮してはいない。もし増やした休日を伝統的な年中行事に配置すれば、現在の物質の再生産を促進する上に、社会文化の再創造にその機能を發揮することも可能であろう。

古典的社会学理論では、生産と消費を対立する類型にまとめ、消費を制限すれば生産の増加に有利であることを信じられていた。その後の理論では、消費を増やすことが生産の増加に有利であることを新たに認識した。新理論では、休みと消費は需要が生じ、再生産を促進するだけでなく、この過程で特定の観念が具体的にあらわれ、特定の社会関係が構築され、安定され、更に、特定の社会文化が延長されそして強化されることが可能であることを主張した。簡単に言えば、休みと消費は物質の再生産を生じさせるものだけではなく、社会文化再創造の機会と仕組みでもある。すべての休みを民俗基礎のない日に配置するより、むしろ伝統行事に配置した方が、より一層社会的な意義を持つことができるのであろう。メーデーと国慶節にはそれぞれ一日の休みさえあれば我々の必要である儀式とその他の活動を十分行うことができるので、それ以上の休みは意味皆無であろう。清明節、端午節、中秋節、重陽節を法定休日とすれば、それらの意味がない休日より消費を刺激する目的を達成できるのであろう。また、中華民族の重要な価値を生活の中で一層発展させ、そして継続させていくことができるのであろう。

イギリス、アメリカ及び欧州大陸などの先進国では、歴史のある宗教、民俗及び伝統行

事や記念日に、多くの法定休暇を配置している。例えば、クリスマス、新年、イースター、国慶節（女王誕生）、記念日（勝利記念日）、メーデーである。それらは我々に二つの啓示を与えてくれた。一つは、現代国家の概念と歴史文化の継続性の双方に配慮を加えることである。それは、国慶節を重視し特別な休日を国民にあたえ、国のために犠牲になった人々を記念すること、また、文化の根源、文化の同一性及び歴史の継続性を重視し、同一性の歴史をできるかぎり延長させ、そのことによって宗教的な記念日と皇室記念日の地位を維持していることである。もう一つは、伝統行事と現代の記念日の需要に応じて休日を設けることである。その結果、政府の現代記念日あまりにも多くて、重要な伝統行事活動を行うための休日がないという問題は基本的には発生していないのである。

中国における一部の伝統行事は、周辺国でも重視されている。春節は韓国、ベトナム、シンガポールでは最も重要な祭りとされている。特に、韓国では中秋節を法定祝祭日と指定している。日本も昔から中国と同じ旧暦を使用し、盛大に春節を祝っていた。端午節も祝っていた。1872年明治政府が西暦の使用を公布し、春節を祝う習慣と儀式を西暦の元旦に移した。そして1873年から、春節と元旦を合体させ、中国のような近代以来存在している祝祭日二重構造の問題を避けたのである<sup>12)</sup>。日本は更に三月三日、五月五日を祭事としている。それらによって我々は、異国の人々がわが国発の伝統文化を尊重していることから、我々は更に民衆に根付いた伝統文化に、適切な地位を与えなければならないという啓発を得たのである。

現在香港、台湾ではどちらも春節、清明節、端午節、中秋節を法定休暇としている。これは我々が直面することができる事実である。大陸と香港、台湾、マカオは近代化への道及び近代文化に対してイデオロギーの違いがある。しかし、兩岸四地の民衆は、伝統的な年中行事文化を相互認識している。中国共産党は、一時期自らを近代の代表、未来の代表であると位置づけ、そのためには、伝統と決裂することさえいとわなかった。それは、過激的な行動であり、文化面においては深刻な問題をもたらしたが、全体から見ると過去の一時期に、国家近代化建設を加速するために、民衆を指導することには有利的であろう。しかし、我々が直面している最も重要でかつ緊急な問題は国家の統一であり、その次は政府統治の合法性の問題であることを認識すべきである。近代化はすでに軌道のプロセスに乗っているのだ。本研究が関心を寄せる祝祭日文化からいうと、この二つの大問題に対して、我々は次のような答えができる。①祝祭日を（基準）印として、それと同質な特徴を持つより大きな時間フレームをもって、領土を印としている空間フレームに対して、共同

12) ここで言う中日両国間の差は思想上の原因以外に、技術的な壁も存在している。月の形は中国においてはいくつかの重要な祭日の存在の条件であり、満月がなければ中秋節も存在しない。しかし、このような問題は特別に日本には目立ってはいない。中国の民族祭りと中国人の月に対する美意識及び旧暦が存続されるかないかということは密接に関連している。

的な認識を強化し、それを通じて国家統一の目標に努める。②民衆文化を選択的に承認し、そして積極的に引き入れることによって、政府を民族、民間の優秀な伝統の代表にさせるようになる。そのことによって民衆は、政府を自分の代表として認める。即ち、政府は伝統的な年中行事に対して、制度上の地位を承認することによって、元来無視された部分の代表の合法性を得られるのである。かつて、伝統文化を主張した人は保守派とみなされ、伝統文化に反対する人は正当性があるとされていた。今はすでに昔の比ではない。今日の政府は伝統、特に民間の伝統を保護し、発展させるものである。

### 伝統的な年中行事の文化価値

中国の伝統的な祭日は、中国における多様な風習の代表であり、豊富な意味を有し、中華文明における思想上の精華を凝集している。それは中国人の哲学思想、美学観念及び倫理思想の表れである。我々はその中から現実的な意義を十分に取り出すことができ、それによって今後の祝祭日文化の建設において、上手な利用がなされるのである。

中国の伝統的な祭事風習は、中国民衆と自然との関係に関する素朴で、かつ深い思想を表している。この祭事システムの設置は太陽、月と地球、人類との両関係に配慮を加え、民衆を自然のリズムに沿って気候周期の規則に適應させることである。その主旨においては様々な重点があるが、その中には、人と自然との調和の理念がすべて含まれている。このような哲学的な思想は、今日においては極めて貴重である。人々の祭事儀式は自然に順應する一面を表しながら、成果を上げるという一面も表している。人と自然の調和は人が受動的に自然に寄りかかることではなく、人の努力によって達成された境地である。「積極的に適應する」という考えは、今日においても依然として優れた世界観である。

中国人は自然に適應し、そして自然を楽しむことができるというレベルまで至っている。人々は祭事活動の中で自然に親しみ、清明節にはピクニックに行く。端午節には川に赴き、中秋節には月見をし、大晦日の夜には寝ずに新年を迎える。それらの祭事活動を通じて成長の美、運動の美、円満の美を味わうのである。このような大自然に対する美意識の社会と、人倫への転換の観念は、円満、団欒を価値のあるものとする社会観になった。

人々は平日には生計の維持に働き、祝祭日を立てることは無論人々の体を休ませ、忙中閑ありの楽しみを味わうことであるが、やはり何と言っても祝祭日は一種の共同文化である。主に文化の価値を伝達し、人々に一定の社会関係を立てそして維持する機会を提供するわけである。単に四大祭事活動から看ると、社会はよろこばしい環境を作り、人々に相互集まって儀式や礼節を通じて、人と人との正しい関係を育成させようとしている。衣食住、交通などの生活面の基本的な事項であろうと、飲食や行楽であろうとすべては進呈、お返し、分かち合い、ともに楽しむことを強調するものである。それは、固有関係の刷新

と発展を達成させる<sup>13)</sup>。中国は、一つの文明社会として、その文明の象徴は祭事習慣の中に直接表現されている。

生命力のある文明は歴史的関心を有すべきであり、未来に展望を持つべきでもある。祭事文化の設計とは、民衆に特別な日に具体的な活動を行わせるものであり、同時に、これらの活動を人々の短期的な生活目標、長期的な希望、人生の夢と関連させることでもある。中国人は単一で共通の宗教信仰を持っていない。人々は祭事活動の中で年寄りを尊敬し、先祖を記念し、神霊を参拝する儀式を通じて、歴史の尊重と伝統の継続の約束を表している。また、福を祈り、子孫を祝福することを通じて未来に対する希望、関心及び愛情を表している。中華文明の人間性の美や中国が一つの共同体として存続できることは、自分たちの祭日習慣の中に内蔵している契機に依拠しているからである。

このなかには、「迷信」とされる可能性があるものもある。しかし、人々は「迷信活動」を行う意識がなく、多くの場合、より具体的な迷信方式を行うことによってかなり抽象的な思想に関心を持つ。また、我々は概念上に信仰、俗信及び迷信を区別すべきである。信仰と俗信は、共同体価値が共存する心理的な基礎である。劣悪な結果を生じた信仰こそ迷信に属してよい。もし祭事活動中生じた信仰と俗信を迷信とみなされたら、我々の社会は相互信頼と共同の規定がなくなってしまう。社会発展と民衆生活レベル向上と、政府と知識人の協力があれば、信仰と俗信を迷信とされる可能性はますます低くなるはずであろう。信仰と俗信（その中の一部が迷信とされている）のない社会は、これまで人類の歴史上に現れたことがないのである。

今日に、伝統祭日の中で包含した文化価値は、依然として多くの民衆に賛同され、追及されている。我々は、国家の目標を実現するためにこのような巨大な文化資源を借りることができる。最も基本的なのは、現代の政府が多くの民衆が熱中している伝統文化に対し、制度上の地位を与えない理由がないことであろう。

## 現在祝祭日システムの改善に対する意見

本研究では中国の祝祭日に対して歴史的な変遷の整理や中国近代以来祝祭日システム設置の検討を通じて、世界一部の国の祝祭日制度を参考した上で、今日における中国の祝祭日制度に次のような改善を提案する。

一、国家が公布した法定祭日と記念日は、革命の歴史に対する継続の意を表し、中華民族

13) ここで功利主義の考え方を導入したい。祭日とは中国における社会資本の最も重要な生産の時機であり、祭日習慣は社会資本の最も効率のある生産メカニズムであることがよくわかる。一定の意味において、中国の文化および社会的連続性と中国の祭日習慣の伝授及び相統とは相互に因果性がある。

の長い伝統への尊重でもある。

記念日には婦人デー、メーデー、青年節、国際児童節、中国共産党成立記念日、中国人民解放軍健軍節、教師節、国慶節以外、辛亥革命記念日、抗日戦争記念日、科学進歩記念日、孔子誕生記念日なども入れるべきである。特に革命烈士記念日を設置すべきであり、国のために献身したすべての先輩たちをしのぶ。その中に、以前も設けたことがあるように、教師節と孔子誕生記念日を合併し、一日の祝祭日とすることも考えられる。

今日の祝祭日は現存の元旦、春節、植樹節を含む。政府は重大かつ伝統的な祭事である清明節、端午節、中秋節なども国の祝祭日として承認し、公布すべきである。

二、民衆が旅行と正月の準備のために春節の休日を一日、二日程度前に移し、清明節、端午節、中秋節を法定休暇システムに入れる。更に、国は春と秋のメーデーと国慶節の休み期間の一部を清明節、端午節、中秋節に移すことを考慮すべきである。

法定休暇により民衆的基礎をもたせ、文化を累積した伝統的な年中行事へと移させる。文化面において祝祭日システムを通じて、大陸と香港、マカオ、台湾とをより近づけ、海外の華人を中国とより親しいものにさせる。中国政府は多様な面において代表権を有しているが、その中で、一部のものは代表できないかもしれない。しかし、絶対に代表すべきものがあり、それは文化なのである。中国政府は文化面でより完全に、より全面的に中国を代表すべきである。

もしこれらの重大な祝祭日の休みに民衆が帰省できれば、経済面において希望する休みを通じて内需拡大の要求を満足させることができ、多くの民衆が望んでいる生活文化と社会活動への参加をも満足させることができる。また、文化において中国の歴史の継続した正当性を代表することを強化できるのである。更に、春節期間中の交通問題を緩和することができる。

伝統祭日は旧暦によって計算されているが、国の主な暦法は西暦である。旧暦の祭日は西暦上には固定できず、混乱を招く可能性もあるではないかということを心配する人もいる。しかし、我々が注意すべきことは、世界においても休日を西暦に固定させていない国もあるということである。例えば、イスラム教の国家はほとんどこのようである。たとえ西側諸国が若干の祝祭日を曜日に固定することであろうとも毎年変動している。中国の祝祭日の休日の調整に表れる可能性のある問題は多くの国のやり方から、すでに問題がないということが証明されている。新月と満月の原則にのっとりた旧暦は科学的で、正確である。中国の農村の人々は、依然として旧暦を使用する習慣を持っている。都市では、ほとんどの人々はカレンダーを利用し、旧暦と西暦の比較対照ははっきりしている。人々は毎年の休日はそれぞれ旧暦と西暦のどの時間にあたるかは知る条件と機会がある。

三、革命烈士記念日と植樹節を国の祭日とし、清明節とつないで休みを与える。

清明節に烈士陵园へ墓参りすることはすでに全国の慣例である。近年黄帝、炎帝に参拝するという新たな祭事が盛り上がっている。新しい記念日ではこの二つを一緒にする。この期間中、特別に「烈士記念日」を設け、革命烈士だけを記念しない。そうすれば、わが国の歴史に対する共同認識を十数年、或いは百数年から中華文明の意義上の歴史的尺度まで伸ばすことができるのであろう。

その日に民衆がみんな実家の先祖の墓参り行くのではないかと心配している人がいる。ここで私は聞きたいのは、現在においても先祖に対する感謝の気持ちを持ち、墓参りをする多くの民衆がまだ存在しているがあなた達はすでに長い間それを阻止し、さらに継続的に困らせようとしている。何年後か社会が普遍的に先人に対する感謝の気持ちさえなくなった時代が本当に訪れた時に、このような華人世界の秩序はどのようなになってしまうのであろうか。人々はこの時間を利用して多くのことを処理でき、一部の人或いは多くの人が墓参りしに行くことは決して悪いことではない。民衆が墓参りに行く習慣がなければ、烈士を記念する活動に意義があることを人々に信じさせることは難しいであろう。

この時期は植樹にも適し、春のピクニック、お墓参り及び植樹を一緒にすれば、各方面においても大変便利である。清明節は一般的に西暦の四月四日から六日の間なので、我々は西暦の四月四日と五日を烈士記念日と植樹節に指定することができる。一部の年には、清明節と重なる可能性があるだろう。どうであれ、その三つの祭事を一つの連続休暇にさせ、主なテーマは先人を記念し、春のピクニック、植樹、自然を愛することである。

四、省、自治区、直轄市が地方性の祝祭日と記念日を実行することを容認する。そして国の法定休暇以外、地方性の休日を制定することも容認すべきである。

五、祝祭日制度の改善に信頼的な民意基礎を有するために、全国的なアンケート調査を実施し、具体的な案が民衆の十分な支持を得ているか否かを見るべきである。

我々がこのように改善を希望している理由は、まず現代新興の記念日と民間の伝統的な祭日が儀式フレームと有限休みを奪い合いという緊張関係を緩和させることであり、国家に時間の管理に対して道具性の考え方への偏向から一部の政治価値と文化価値へと転換するように重視を促すことにある。そして祝祭日システムは民族国家が時間管理上において民族性の重視点を強調すべきである。このような変化は、我々の文化自覚の時間管理上での一種の現れである。

訳／張慧娟（愛知大学国際コミュニケーション学部非常勤講師）

2005年2月1日(火) 第34回国際学術交流プログラム講演会

於 愛知大学豊橋校舎5号館4階542・543会議室